

県境を越えた 「北上川自然環境圏」づくりへの挑戦

北上川流域市町村連携協議会 会長 岩手県水沢市長 高橋光夫

はじめに

岩手・宮城両県の境を越えて流れる北上川は、東北一の幹線流路249kmで、全国でも信濃川、利根川、石狩川、天塩川について5番目となっています。流域面積は、10,150km²で、利根川、石狩川、信濃川について4番目の大河です。

この広大な北上川流域は、歴史的には藩境で分断され、近代は県境の壁が大きく立ちはだかり、「境」は生活圏あるいは経済圏として一定の効果を果たしたものの、水循環により形成される賦与資源の有用な発展を阻害する大きな要因になっており、水環境の問題意識も水源地と下流では大きな隔たりがあり、正に目に見えない境がありました。

北上川に接する全36市町村等で構成する当協議会では、水環境の取り組みは、分水嶺を起点とし

河口域或いは海洋を終点として捕らえなければその効果は図れないことから、行政境等の人為障害を取り払い、理念として北上川流域を「北上川自然環境圏」として位置付け、分水嶺から県境を越え流域全ての人々が一体で水環境改善活動に取り組んでいます。

悠久の北上川は「母なる川」として全ての生き物の命の源を始め、農業等産業の資源や流通の幹線機能そして、上・下流の交流による文化の醸成と固有の風土の形成を育てるなど地域圏に絶大な役割を果たしてまいりました。

雲上の東西の分水嶺からしたたる水滴は、古今変わることなく悠々とした北上川を目指しています。

「北上川自然環境圏」は、行政境と流域住民の心の境を取り払いました。

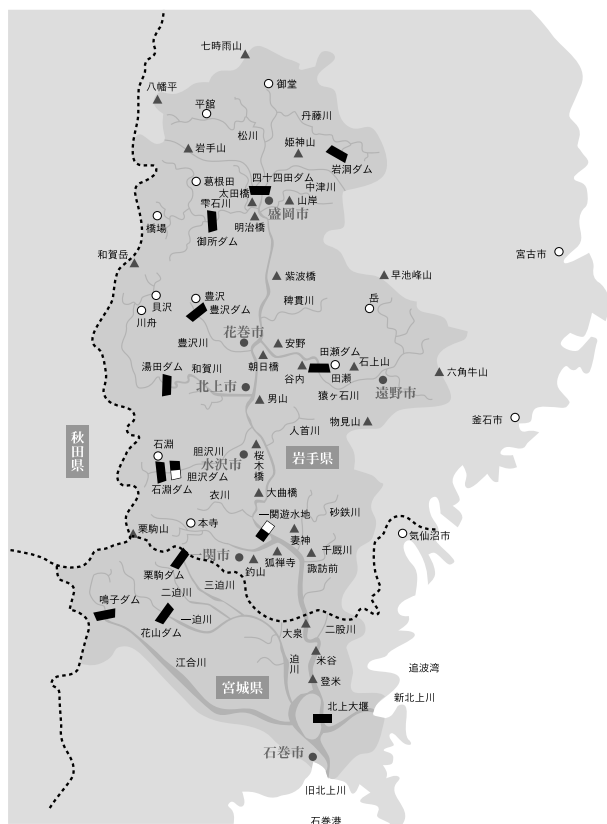
北上川流域の人々の高い意識の中で自然の営みを崇め、失われたものは回復し共に共存する心地よい環境づくりを進めていきます。

北上川健康改善推進事業

協議会の主な活動に環境問題への取り組みがあります。北上川流水域や河口域で顕在する水問題はその地の問題として捉えられがちですが、本事業は分水嶺から海に至るまでのテーマとして提起し、広大な流域全ての人々が一体で水環境改善活動を促進しながら市町村境及び県境を越え、官・民連携で事業を行っています。

「北上川健康改善推進事業」は、川環境の健全化へのプロセスを人の身体に見立てて健康状態とし、手法として診断、治療、回復を体系的に行い、環境意識への目覚めと流域交流を推し進めながら100年の長い時間の中で水循環と緑の復活を成し、川健康体を回復しようとする事業です。

そのなかの個別5事業を称し、「水環境5大事業」と位置付け、環境調査、環境研究、流域清掃、河



北上川自然環境圏

県境を越えた「北上川自然環境圏」づくりへの挑戦

北上川流域市町村連携協議会 会長 岩手県水沢市長 高橋光夫

河口清掃及び水源地の植林と水環境の健全化事業を組み立て、水源地から河口域までの交流・連携活動の中で活動しています。

・水環境5大事業

①「北上川健康診断」

（全流域：平成10年～：6月～11月）

北上川健康診断士（会員市町村の小中学生）が、年2回の定点観測による水質及び水生生物等（水質、水生生物、鳥類、昆虫類、ゴミ）の調査を実施し、調査ごとのデータ比較と原因調査及び改善の検討を行っています。

②「北上川健康診断研究発表会」

（岩手県水沢市：平成10年～：1月下旬）

北上川健康診断結果を、上・中・下の3流域から健康診断士6グループが代表して発表し、流域により異なる状態などを学んでいます。



北上川健康診断



北上川健康診断研究発表会

③「北上川一斉クリーン作戦」

（全流域：平成9年～：通年）

北上川及び流入支川周辺の全住民を対象にした清掃活動です。環境の汚れとなる物の排除と景観の改善及び目に見える活動による意識啓発を行うこととし、高水敷あるいは河川樹林に散在する生活ゴミ等を清掃しています。



北上川一斉クリーン作戦

④「海岸清援隊」

（宮城県北上町：平成12年～：7月第2土曜日）

河口域の海岸に打ち寄せられる川からのゴミを実見し、源流からつながる流れがもたらす問題を考える機会とし、全流域住民が協働で清掃

活動と流域交流を行っています。また、清掃後、手づくり名刺交換や健康診断士による地引網体験もあります。



海岸清援隊



上下交流：手づくり名刺交換



上下交流：地引網体験

⑤「22世紀ブナの森づくり」

（岩手県胆沢町：平成13年度～：10月上旬）

源流森林の形成と流量の安定供給、水質の健全化及び流域上・下流交流。胆沢ダム建設による採石跡に森を復活させるべく最終目標25ha、25,000本のブナの幼木を植樹します。



22世紀ブナの森づくり

また、15年度からは、健康診断士等を対象に「有用微生物（EM菌）を活用した生ゴミの肥料化実験」を行っており、給食の生ゴミをEM菌を利用し堆肥化させ、さらにその肥料を使い野菜・花等の有機栽培を行い、循環型の環境学習もしています。



有用微生物を利用した循環型の学習

県境を越えた「北上川自然環境圏」づくりへの挑戦

北上川流域市町村連携協議会 会長 岩手県水沢市長 高橋光夫

環境活動以外の連携活動

会員市町村の首長の施策交流・研修等を行うため「市町村長会議・研修会」を開催しているほか、川の水質汚染は、流入支川によることが大きいことから、「北上川全流域市町村（会員外）への環境事業への参加呼びかけ」、個別に開催をしていた「北上川ゴムボート川下大会（盛岡市）」、「アテルイ北上川自然発見カヌー・ゴムボート大会（水沢市）」、「みやぎ北上連邦北上川川下り大会（中田町）」を連携し、北上川固有の資源と魅力を活かしスケールメリットの大きい「北上川三大川下り大会」とし「河川行事連携化支援」などを行っています。

また、会員市町村の特産品を集めた「連携物産展」も開催し、河口の宮城県北上町では、北上川のヨシから和紙を作っており、その紙を北上川流域の学校の卒業証書に利用できないかとか、岩手県水沢市の南部鉄器は、街灯・レリーフ等温かみのあるまちづくりの資材として活用できるのではと提案もしています。

さらには、北上川学習交流館（あいぽーと）で開催されるイベントに協賛し、流域の特色のある食を集め流域住民に提供した「北上川流域食フェスタ」や流域に伝わる芸能を披露した「北上川流域



北上川流域 食フェスタ

子ども郷土芸能」などを開催し、食文化や郷土芸能文化の全国発信も行っています。

平成16年度からは、本格的な経済活動事業「北上川流域まちの駅」にも取り組み、北上川流域市町村の情報発信・共有を行い、市町村の特産品・食等の販売の拡大と北上川流域ブランド化を目指し、地域の活性化を図っています。



北上川流域 まちの駅

事業効果

「北上川の健康診断」及び「研究発表会」は、学校の正規授業に組み込まれ授業の一環となり、児童は任意の参加と違って授業としての重要さを認識し取り組みの姿勢が良くなりました。また、「海岸清援隊」及び「22世紀ブナの森づくり」は、学校週5日制に対応した総合学習の一つとして参加されるようになりました。

当初は「海岸清援隊」及び「22世紀ブナの森づくり」は、健康診断士が中心でしたが次第に中高生、茶髪の若者や高齢者等の一般住民が参加するようになり、開催地の地元の人たちは毎年ワカメ汁やキノコ汁を作って待っていてくれる恒例の上下流域交流のイベントに成長しました。

さらに事業を通じ会員市町村同士の繋がりが強く

なり、源泉の岩手町の小学校と河口の北上町の小学校、水沢市の小学校と登米町の小学校等の交流活動にも波及しているほか、岩手町は源泉の地に、交流と連携のシンボルとなるよう流域36市町村の苗木を植樹し、川の駅を平成16年6月に整備をしました。

当協議会の活動は、子どもと一般住民が混在しての事業が多く、世代交流等の機会となり年代を超えた活動の深みを感じられるとともに、子どもの活動は大人の環境への意識も変えてきており、流域で大きな活動の広がりとなっています。

広大な2県の県境を越えた市町村連携は全国的にも希で、「北上川の健康改善推進事業」等は、北上川の上下流問題を流域住民が同じ目線で考え行動することができる先進的な事業であり、広域的な官民協調事業の地域づくりでもあります。

おわりに

従前の環境関係事業は継続し、底辺の拡大を進めます。特に、非会員の山地の市町村に理解と参加を強く求め、全流域での協働となるよう訴えています。

また、仮称「北上川流域水源涵養保全基金事業」の検討を行っていきます。これは、水源地或いは山地は、森林産業の低迷、山村の地域事情等で森林の手入れ等がなされず、健全な緑の保全や水環境に大きな影響が発生することが懸念されていることについて、属地的な解決に委ねることなく、

「自然環境圏」全域の問題として捉えていこうとするもので、「北上川自然環境圏」は輝く“商標”となることを目標にしています。

さらには、平成17年度は今回の表彰を記念して「川・海・山、そして空、北上川自然環境圏からの夢メッセージ事業」を計画しています。北上川の健康診断士に、川・海・山、そして空から北上川の体験学習の機会を提供し、子どもの目線で感じ取った様々な問題やその解決策など、北上川自然環境圏からの夢メッセージとして作成し、国土交通大臣及び河川局長に夢をかなえるにはどのようにすれば良いか等の提案を行いたいと思っています。

今後も連携によるスケールメリットを生かした活動を推進していきます。



協議会発行 冊子、リーフレット